

## ◎ 連合会だより

高齢者協同組合の県毎の設立が4番目の福岡で一つの区切りをつけ、11月後半から12月にかけて、センター事業団の宣言集会在、岡山、東京、埼玉など立て続けに行われ、新聞紙上ににぎわしている。

そんな中、佐久総合病院総長の若月俊一先生と永戸理事長との対談が現地で行われた。内容は、労協新聞に掲載の予定だが、高齢者協同組合の根本の高齢者観、生命観ということまで踏み込んだものになったと聞く。非営利・協同の可能性がまたひとつ開けそうだ。

12月2、3日北海道で2回目の協同集会在が開催された。2年前の第1回では、労働者協同組合の姿が充分見えなかったが、今回は、旭川、釧路、砂川の3つの事業団（企業組合）が統合し、北海道労働者協同組合として活動を開始し、「協同のネットワーク化で切り開く地域づくり」の要とし

ての姿が見え始めた。しかし、労働者協同組合が社会的認知の最小単位としての規模と内容を獲得するには長い道のりがある。北海道労働者協同組合のがんばりに期待するとともに、連合会としても、昨年の北海道での全国総会の成功の力を最大限發揮すべく決意を新たにしたい。

記念講演に立たれた京都大学の池上先生は、「今日は、実践家に奮起を期待しアジッタ」と夕食の席でおっしゃっていたが、人間ネットワークによる自立支援のために、知恵を出し、工夫をし、知的資産を継承し、生活の質を高める仕事を全力でおこすこと、一人ひとりの個性をのばす豊かな感性、感動する心を忘れず、労働の人間化、生活の芸術化をすすめること、わが実践のつたなさと日常の怠慢を胸に刻みこんだ講演だった。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

## ◎ センター事業団だより

本格的な寒さの到来と共に、我々事業団の面々にとってはもっとも熱い季節、1・2・3運動の時期が近づいてきた。8回目を迎える今回は、大きな希望と共に緊張感も例年になく高い。高協づくりが運動全体の幅を広げ、問われる主体の力量不足を感じると共に、実践の中で、視野や視点も広く深くなってきている。また、無茶々園などの新たな分野の人々の参加が、いっそう労協運動全体を大衆化し普遍化していつている。一方で、センター事業団は設立以来の事業規模の停滞の苦しみを味わいつつある。とりわけ、生協関連分野での後退現象がある。

1・2・3運動は、これまで以上に事業拡大の意味を問う事となるだろう。規模の停滞と共に、「100億」という中期計画の達成は、単なる数的目標以上に、より深みと広がりを求める事となってきている。高協づくりの推進に関わったヘルパ

ーや給配食、個配。こことのつながりを展望する老健施設関連の事業。そして、本格的な大病院への挑戦を柱とした病院関連の再爆発と集合住宅管理などの新規分野。これら一つ一つを見ると、仕事を増やす意味が、いよいよ働き方や社会構造の変革、仕事おこしと直結した取組として意識されなければいけない段階に入っている事を意味する。それは、組合員一人一人のライフサイクルに、仕事おこし、事業拡大が意識して組み込まれていく段階といえる。私個人は、そんな思いをしながら、「今年は大病院の年」と意識して、盛岡赤十字で掴んだ教訓を全国化したいし、その意欲も自信もみなぎり始めている。複雑化し高度化すればするほど、「労協を何のためにやるのか」という根本論が問われるように思う。挑戦の姿勢も含め、初志に立ち返った運動を展開したい。

古村 伸宏（労協センター事業団・事務局長）